文化遺産と＜絆＞

――菅楯彦画　藤沢南岳賛「猿田彦」の紹介――

藪田　　貫

およそ博物館に縁のない人間が、博物館長高橋隆博氏が中心となって平成17年４月に設立された「なにわ・大阪文化遺産学研究センター」の活動に関わることで、光栄にも『阡陵』の貴重な誌面をいただくことになった。とはいえ、まともに書ける題材がない。そこで、この度、センターの資料として収集された一幅の画幅を紹介することで、その責めを果たしたいと思う。

その画幅とは、右に掲げたもので、菅楯彦が描くところの「猿田彦」の図。興味をそそるのは、藤沢南岳の賛が加えられていることである。いうなれば、近代大阪を代表する画家と漢学者が、「猿田彦」を共有することで出来上がった作品である。さてこの二人の間に、どのような絆があったのであろうか？

なにわ・大阪文化遺産学研究センターの研究員として活動することを通じて、私がいま感じているのは、文化遺産とは人と人の＜絆＞だということである。

たとえば関西大学博物館の誇る考古遺物は、大阪毎日新聞社主本山彦一のコレクションだったということはよく知られているが、それが博物館に収められるには、本山と末永雅雄の絆があった。

その本山から博物館に招来されたものにいまひとつ、大阪をはじめとする墓碑銘の拓本があるが、それはもともと木崎愛吉（1865～1944）の採拓したものであるという。木崎は慶応元年大阪生まれ、大阪朝日新聞記者として健筆を振るう一方、大正２年（1913）の退社後は、郷土大阪の研究に邁進、大正11年、不朽の名著とされる『大日本金石史』を著わしている。

木崎―本山の絆が、空襲や風・雨水の影響を受けて壊滅する以前の貴重な墓碑銘を、私たちに遺したのである[1)]。

また本山のコレクションには、考古学史上著名な藤井寺市国府遺跡の遺物があるが、その地を発掘したとき、本山たちは道明寺天満宮を発掘拠点とした[2)]。当時の宮司南坊城良興が、本山隊に全面協力したのであるが、その道明寺天満宮には、泊園書院藤沢南岳の手で大成殿が建てられ、孔子祭釈奠が大阪淡路町から移されている。平成15・16年とつづけて釈奠に参加する機会を得たが、私が藤沢南岳（1842～1920）を強く意識したのは、この場においてである。

ここには道明寺天満宮宮司南坊城良興と藤沢南岳との絆があるが、その絆は泊園書院とその門人との間にも築かれているだろう。

聞く所によると、松原市別所の豪農中山家には、南岳の扁額が掛けられているという。また八尾市には、万願寺村出身で地価修正運動に尽力しに府会議員・貴族院議員を歴任した久保田真吾を讃える碑文が、南岳の手で撰ばれている[3)]。「時に近畿を巡遊して講演、学名四海に聞こえ

菅楯彦筆塚

た」(三好貞司『大阪人物辞典』) 南岳の足跡は、大阪府下に扁額や書軸、蔵書、碑文として確実に残されている。それを調査することは、大阪市中淡路町の泊園書院から、大阪府下の門人たちにひろがる絆を確認する作業に通じるであろう。

菅楯彦 (1878～1963) も、南岳に劣らずよく知られた人物であるが、なによりも鳥取生まれながら、晩年、「浪速御民」と署名した志が頼もしい。本業の画業はいうまでもなく、舞楽・文楽・祭礼・風俗などを研究する一方、「天神祭・住吉祭・生玉祭などの復興に寝食を忘れて奔走している」(『大阪人物辞典』)。最初の大阪名誉市民の栄誉を受けるにふさわしい活躍である。住吉社と四天王寺の境内には、独特の書体を彫りこんだ碑文が立っている。

そんな近代大阪を代表する南岳と楯彦だが、本作品の賛の脇に「七三翁南岳」と署名されていることから、南岳73歳、大正3年 (1914) の作であることが分かる。対する楯彦は37歳。親子以上に歳の離れた二人が、ここでは猿田彦を共有しているのである。

猿田彦の上部に書かれた賛は、「宣導神威ニ付粛薫風暖日馬嘶高」と読め (ただし粛は自信がない。ご示教を得たい)、神事祭礼に登場した猿田彦を詠み、描いたものではないかと推測される。

そこで大阪の祭礼に登場する猿田彦について調べてみたが、幸い、太田南畝『蘆の若葉』(1801年) につぎのような証言がある[4]。

「ややありて鼻高き面きたる猿田彦の神馬にのりてわたる」(6月17日御霊社祭礼)、「かの猿田彦の神馬に乗りてわたる」(21日仁徳天皇稲荷明神祭礼)、「次に猿田彦の面きて装束し、馬上にてわたる」(22日座摩社祭礼)。

このように祭りの先導をする役割として馬上の猿田彦は立て続けに登場し、とくに御霊社の祭りでは「鼻高き面きたる猿田彦」とあるが、本作の猿田彦も、たしかに鼻が高い。

これだけのことから断定するには憚られるが、南岳と楯彦は、ともに大阪の夏祭りに登場する猿田彦を題材に共有することで、本作品がなったのではないかと推測しておきたい。

いうなれば大阪市中の夏祭りが、二人の間の絆を作り上げていたのである。

久保田真吾碑

(東山本町九丁目)

碑吾真田保久

河州高安郡管村十有四背山臨野形勝遺英今則廢郡稱村邨有久保田氏也為名族住
萬願寺里今主人真吾君際維新改革明治五年為區長六年出仕堺縣十三年転八尾郡
書記十七年為戸長二十二年為府會議員明季為貴族院議員三十年解職三十二年為
村長聲價日重　朝廷始議地租改正也欲試施戮内以量可否税所縣令乃與君謀君諾
之決然行其郡及改正選於海内後者多低於先者君乃更請軽減于官辛苦奔走以成其
志云服部川為地上有城址　天智帝時始所築至大寶元年廢之然渓谷錯落毎霖雨必
壞堤浸田三十四年三十六年頻値其害君議改修村民憂巨費不応君於是謀村會修里
改築周年竣工而水害止矣衆大感恩欲建一碑以顕君功君辭不聴来乞余文余与君交
二十餘季未嘗見疾言遽色天資温厚盤實憂細民尤切自奉不奢一村化之其致力於政
治者前後三十有七年良改頗多若創置學校修治道路不可枚挙且夫治水之效右人所
重如君功豈可不勒平衆人之挙實冩其宣君名真吾字祐健号園水銘曰
挙上致敬　撫下惠寛　減租防水　人感厥恩
至誠殘致　片礎維恒　令名以高　細民以安

従三位伯爵宗重望題額
浪華　南岳藤沢恒　撰
明治四十年五月　建　　従五位勲四等大郭屯書

藤沢南岳撰文

【注】

1) 櫻木潤 (調査報告)「関西大学博物館所蔵拓本目録」『なにわ・大阪文化遺産学研究センター　2005』2006.4

2) 南坊城光興「国府遺跡発掘と道明寺天満宮」『阡陵』50, 2005.3

3) 坂上弘子編『神光寺墓地墓碑銘』1999.7

4) 近江晴子「大坂三郷の氏神さんと夏祭り」NOCHS OCCASIONAL PAPER 1『なにわ・大阪の神社』2005.9